

# 風吹岩

門哉彗遙



「あんた、もう休みなさい。壊れかけてるよ。」

と、白衣を着たその人は、優しい笑みを浮かべながら僕に言った。診断によると「混合性不安抑うつ障害」だそうだ。僕は山ほど薬をもらって、仕事を休み始めた。ちょうど6月1日だった。

食品会社のレトルト部門の営業をしていたが、最近、

他社との競合が激しく、ノルマを達成できなくなってきた。部下からの不信な視線も感じるようになり、かなり精神的にも肉体的にも参っていた。

もう、仕事から逃げ出したかった。大地震でもきて、会社が壊れてしまえばいいのにか、階段から転げ落ちて、骨折でもしたら、休めるとか、そんなことを考えるようになっていた。

夜になると、友人からもらった睡眠導入剤を飲みながら、バーボンをボトルごとあおっていた。そうでもしなければ眠れなかったからだ。酔った手で、引出しから登山ナイフを取り出し、刃を広げた。先端を胸に当ててみた。ぞくぞくした。このまま力を入れたら、ナイフはぬぷりと入っていくのだろうか。ちくりとした。Tシャツに小さな穴が開いたようだ。ナイフを壁に投げつけた。今度は、足元に転がった

空き瓶を拾い上げ、自分の頭に打ちつけた。割れて頭を怪我したら、仕事を休めるのではないかと、心の中の自分が囁いたからだ。でも、いくら叩いても、割れなかった。今度こそと思って叩くのだが、頭の芯がずきんずきんとするだけで、頭がこぶだらけになっていった。痛くて泣きながら、バーボンをあおった。そんな毎日が、続いていた。

そんな僕の異変をかぎつけたのが、元恋人の洋子だった。彼女は僕よりも3年後に入社してきて、経理を担当していた。新入社員の紹介の時から、強く印象に残ってはいた。かなり派手な美人だった。だから、男性社員の中では、話題にはなっていて彼氏はいらぬのか、いないのか、いないのだったら誰が彼女を射止めるのか、飲めばそんな話ばかりしていた。早速アプローチをしているやつもいたようだった。

でも、成功したものは誰もいなかった。僕も、「彼女いない暦」3年になっていたので、そろそろ恋人が欲しかったのだけれど自信はなかった。もしかすると、まだ前の彼女を吹っ切ることができていなかったのかもしれない。

ある時、僕が出した納品伝票と経理からまわってきた書類に「0」が一桁違っていることに気が付いた。

顧客のところへ出かける直前だったので、僕は慌てて経理課に飛び込んで確認を求めた。その時に担当したのは洋子だった。あまりにも初歩的で大きなミスだったので、彼女も恐縮してしまい、泣き出してしまった。とにかく急いでいたので

「泣いている間に、書類、作り直してくれへんかな。」と冷たく言い放ったことを覚えている。それが彼女とのファーストコンタクトだった。それから数日後、



僕の机の上に紙袋が置かれてあった。

「田中健二様 先日はご迷惑をおかけしました。うっかりでは済まされたいミスだとは思っています。以後、気をつけますので、お許しください。経理課

内山洋子」

という手紙と、ハンカチとポプリが入っていた。入社してから、女の子にこんなことしてもらったこと

がなかったので思わず、にやけてしまった。早速、僕はその夜、強引に食事を誘って、そして交際が始まった。

当然のことながら、みんなからはうらやましく思われた。どういう手を使ったのかと聞かれたが、「別に」としか答えていなかったら、經理の古参から聞いたのか「ああ、俺の書類も書き間違ってくれへん

かなあ」と言われてしまった。

でも彼女の内面は、見かけほど派手でもなく、どちらかと言うと人付き合いが苦手な自然を愛する人だった。

「今度、生まれ変わったら私、樹になりたいねん。」  
が彼女の口癖だった。そんなギャップに僕は余計に

惹かれていった。

付き合いも3年ほどたった頃、彼女は相変わらず人気があり、いろんな男性からのアプローチがあった。そして、彼女は結婚をほのめかすようになってきた。僕は、わざと気づかないふりをしていた。正直言って、まだ結婚はしたくなかった。そんなある日、

「見合いらしてもええかな。上司が研究室の人、紹介

してくれらるって。」僕は思わず感情的に「勝手にしたら、ええやん。」と言ってしまった。言ってすぐに後悔した。だから、訂正しようと思ったけど、僕は自身は結婚はまだしたくなかった。でも、洋子のことは好きだった。

僕がぐずぐずしているうちに、見合いをしてしまった話はとん拍子で進み、その秋に結婚してしまっ

た。かなり落ち込んだ。食事も喉が通らなくなり、みるみる痩せていった。同僚のみんなは心配してくれて、女の子を紹介してくれたりもしたのだが、もう、女性とは当分、付き合いたくはなかった。そして、洋子のことを吹っ切るために、僕は仕事にのめりこんでいったとも言える。

彼女は結婚後も仕事を続けた。それは、僕にとって

針のむしろで、いつまでたっても、完全に洋子を忘れることはできなかつた。結婚して2年。子供はま  
だだつた。最近、研究室勤務の夫は、他社との競合  
の中で新製品の開発に追いまくられていて、どうも  
洋子を大事にしていけない様子だつた。別れ話も出て  
いると、同じ経理部の友人からも聞いていた。だか  
ら、僕の異変にも気が付いたのだと思う。というよ  
りも、知らず知らず、僕は洋子にサインを送ってい

たのかもしれない。

5月28日のことだった。会社の帰りに僕を待ち伏せていた。僕が声をかけても無視をするばかりで、一言も口を聞くこともなく、家にまで付いて来られた。玄関を開けるなり、洋子は目を丸くした。一室しかない家の中は悲惨な状態だった。白いもひどかったと思う。几帳面な僕が自分の部屋をこんなさま



で散らかすなんてことは今までなかったし、それにそんなことは、洋子はよく知っていたから僕の生活の異常さに驚いたのだ、恐らく。

「健ちゃん、いったい、どないしたん。なんで？なんでよ。なんでこんなことになるん？」

洋子の反応は過激で、まるで泣き叫ぶようだった。

何故、そんなに不審に思ったが、僕は何も答えられなかった。彼女はどこかに電話をしようとしていた。いったいどこにするのだろうかと思っていたが、そのあたりで気を失ったらしい。だから、その後のことは良く覚えてないけど、それがきっかけで僕は仕事を休むようになったのだと思う。

病院からもらった幾種類もの薬を飲んで、昼も夜も

わからないぼうつとした日々が過ぎて行った。洋子も気にしてくれて、食事を届けてくれていたようだが、あまり食欲もなく、何も感じない日々が続いていた。恋人時代は、洋子が来れば、必ず身体を求めていたが、そんな欲望さえもわかかなかった。

数日過ぎたころ、次第に薬になれてきたのだろうか、意識が少し鮮明になってきたように感じた。寝転び

ながら、いろんな回想ばかりしていた。胎内の記憶  
なんかないはずなのに、母の大きなお腹に父が口を  
つけて

「おーい。元気かー？早よ、出て来いよお。お前は  
男かー？女かー？どっちやー？」

と声をかけている場面まで浮かんできた。僕がお腹

の中にいるんだから、こんな映像が浮かんでくるのは、おかしい。きつと、弟がお腹の中に入っている時に、そんな場面を見て、記憶がすりかわったのだと思う。

ほんのり暗い部屋で僕は、父に、抱きかかえられている。黒い漆塗りの小さな箆笥が、視界に入ってくる。その部屋から見える裏庭はまぶしいけれど、や

わらかくて、暖かな光だ。その光の中で、母が洗濯  
をしている。たらい 盥と洗濯板を使って。その記憶の中  
には弟がいない。だから、もしかすると2歳までの  
記憶なのかもしれない。そんな、自分の一番幼い頃  
の記憶を起点に、時間をかけて思い返して行った。

僕の人生はかなり恵まれたものであったように思  
う。いくつかの岐路があったけど、その度に、示唆

に富んだ人物に出会うことができ、より良い選択を  
してきたと思う。たとえ、それが遠回りであったに  
しても。まるで、いつも誰かに見守られていたよう  
な気がする。

大学時代は、ある青少年団体のボランティアリーダー  
ーをしていて、日曜や長期の休みに子供たちをハイ  
キングやキャンプに連れて行っていたことを思い

出した。よく六甲山を利用した。

そのことを思い出した瞬間に、突然、六甲山に登りたくなった。いや、正確に言うと、風吹岩だ。風吹岩の映像が頭の中に飛び込んできたのだ。たかだか700メートルほどの標高だが、その岩が神戸の街の方向に突き出たようになっていた。そのために、見晴らしは絶景だと聞いていた。子供たちを連れて



登った時には危険だからという理由で、その岩に登ったことはないのだが、一番登ってみたかったのは僕だったのだ。風吹き岩の上に立ちたくなった。そして、全身で風を受けなくなったのだ。

次の日、僕はロックガーデンを登っていた。風吹岩というのは、そのロックガーデンの頂上にあった。やはり少し地形が変わっているようだ。これは震災

の影響だ。いたるところに鎖が打ち付けられている。以前よりは登りにくくなったみたいだ。でも、そのぶんスリルがあって楽しい。汗をかくなんて久しぶりだった。登り始めて30分、高座川に出た。昔ここはイノシシ銀座と呼ばれていて、たくさんのイノシシたちがいた場所だった。コンビニで買ったおにぎりを食べよう。食欲があるのも久しぶりの感覚で、米粒が口の中でエネルギーに変わっていくのを感じ

じることができた。夢中になって3個目を食べ終えた時、ふと視線を感じた。あたりを見渡したが誰もいない、と思っていたら、上流の木立の中で茶色いものが動いた。イノシシだ。震災の後、イノシシは何処かに消えてしまったと聞いていたのだけれど、ここにいたんだ。自分の頬が緩み、立ち上がった瞬間イノシシと目が合った。僕は動けなくなった。悲しいような懐かしいような目をしていた。思わず

声に出して何か語りかけたくなっただけで、次の瞬間にはもうイノシシを見失ってしまった。今のは幻だったのだろうか。

目標の風吹き岩まで、あと1時間。ペットボトルの蓋をしめて再び歩き始めた。ここからがロックガーデンの醍醐味を味わえるポイントだったが地獄谷コースは閉鎖されていた。おそらく岩の崩れがかな

りひどいのだろう。しかたなく尾根道を迂回する  
ことにした。果たして風吹き岩は残っているのだら  
うかと心配になってきた。空間に飛び出た岩だから、  
崩れ落ちている可能性が高い。それと、今更ながら  
不安になってきたのが他の登山客だ。誰にも会って  
ない。たとえ平日だとしても、学生の頃はたくさん  
の人に出会えたのだが。これも震災の影響か？

風吹岩は、もう「The beauty spot of fantastic rocks」

じゃなくなったのか。ロックガーデンへの入り口の大谷茶屋には、確か店の人は居たような気がする。ペットボトルのお茶もそこで買った。あ、でも自動販売機だったか。そんなことを考えているうちに、頂上に近づいてきた。全身が汗だくになっていた。流れる汗が目にも染みた。さて、風吹き岩は……。どうか、残っていてほしい。

あつた！ 風吹き岩は残っていた。青空にくっきりと、その姿は刻まれていた。登山道から外れていて、かなり足場は悪いが、手足を使って滑らないように、僕は3メートルほどの最後の岩を慎重に登った。

岩頭に手がかかった。上半身に力を入れ、下半身を引き上げた。岩頭の足場は30センチ四方しかない。全身が、その上に乗ったが、まだしゃがんだままだ。

もう、掴まるところも何もない。恐る恐る僕は立ち上がった。少し、へっぴり腰のまま、そうつと頭の高度を高くしていった。風が強くて、ふらふらしそうだ。お腹に力を入れ、重心を下に下げるようにしながら僕は、真っ直ぐ立つことができた。

風のシャワーだ。ロックガーデンの岩場をすり抜けた風が一気にこの風吹き岩に集まってくる。その風



を僕は独り占めにした。風に混じるいろんなメロデ  
イヤリズムや光や匂いを感じた。胸の奥でがんじが  
らめに絡んでいた糸がほぐれて、風に流されていつ  
た。いつか観た映画のように僕は両手を広げ、胸を  
そらした。風を全身で感じた。汗で張り付いたTシ  
ャツも、すぐに乾いてしまい、ばたばたとはためき  
出した。まるで、脇の下から翼が生えてきたような  
錯覚を覚えた。もう何も怖くなかった。このまま空

を飛べそうだ。会社でのごたごたなど、もうどうでもいい。眼下に広がる神戸の街や海の上を本当に飛んでみたいと思った。

背中に視線を感じた。さっきのイノシシだ。振り向かなくてもわかった。懐かしさと悲しみを感じたからだ。と思った瞬間、小さな手で腰のあたりを押さ  
れた。

まさか！ イノシシが何故こんな岩の上に。

何故、突き落とす。

やめてくれ。

お願いだ。

落ちる。

嘘だ。

怖い。

嫌だ。

死にたくない。

助けて。

誰か。

生れ落ちた瞬間から今までの人生が走馬灯のように頭の中を一瞬でよぎった。忘れていたことがいっぱいあることに気づいた。幼稚園の時に仲のよかつたヒロミが白血病で亡くなったこと。葬式の最中に

そのヒロミと抜け出して、お寺の隣の公園で遊んだこと。いつか、また会おうねって約束したこと。小学生の時にいじめた女の子のこと。その子が転校してしまったこと。転校先でもいじめられて、電車に飛び込み自殺をしたという噂を聞いたこと。中学の時、精神病院から退院してきた伯母に、性器を見せられたこと。大学の時にバイクで当て逃げしたこと。その後心配で、バイクを山に捨てたこと。大学卒業

間近に、恋人の雅美を妊娠させてしまったこと。

泣いて謝って中絶をお願いしたこと。思い出したくない思い出まで、鮮烈に蘇った。

僕は死んでしまっんだ・・・

いや、僕は飛ぶ。

飛べるはずだ。

飛ぶんだ。

飛べ！

広げた両手をさらに大きく広げた。下から吹き上げてくる風を胸と両腕に捉えた。そしてその風をお腹、腰、太腿へと風を流しながら足が風吹き岩から離れる瞬間、つま先で岩を蹴った。

「ぎくっ。」

岩の欠片と一緒に身体は空中にゆっくりと飛び出た。こんな場面、今までに何度もあったような気がした。時計の針が1秒進むごとに、僕の身体 of 角度は前に倒れていった。視界は空から海へそして街から山へと変わっていった。時間が次第に遅くなっていった。視界が真下の岩場になった時、時間は止ま



っていた。いや、僕は、浮かんでいた。相変わらず風は吹いていた。岩の欠片が下に落ちてゆくのが見えた。風の塊を全身で感じた。全身がはためいていた。

「信じられない。」

僕を突き落としたのは、と後ろを振り返ると全身がゆっくり回転していった。岩の上には、イノシシの姿はなかった。あれは本当にイノシシだったのだろ

うか。

少し体重移動をするだけで、身体は空間を移動するようだ。右手をそっと伸ばせば、右方向にゆっくりと旋回してゆく。背中をそらし、頭を後ろにもっていけば、後ろ宙返りができた。膝を抱え込んで、頭を中にいれると、くるくると回転した。風吹き岩から少し離れた空中で、僕はしばらく無重力遊泳を楽

しんだ。

僕は両手と全身をぴんと伸ばし、体重を前にかけた。滑るように飛び始め、風を切っていった。岩だらけのロックガーデンはすぐに飛び越えてしまい木々が茂る深い山の上を飛んでいた。溪谷が数本流れており、茶色いものが見えた。イノシシたちだ。不安定な岩場を離れ、彼らは森の中で暮らしていた。山

肌が少しずつあらわになり、建物が見え始めた。屋敷のような大きな家がぽつりぽつりと建っている。家の中にプールがある。あれは大学だろうか。芝生のキャンパスで寝転がっている人の隣で、バトンの練習をしているグループもいた。よく似た形の住宅が増えてきた。敷地も次第に小さくなっている。人も車も増えてきた。自分が生まれ育った街に似てきたようだ。阪急、JR、阪神と3本の線路の上を横

切る。それぞれの駅の周辺はスーパーや商店街で人や車でごったがえしていた。巨大な建造物が見えてきた。いや、マンションだろう。幾何学的な模様の中に生活の匂いがした。その屋根の上に降りてみた。風見鶏のオブジェにまたがり一服だ。このマンションの海側はヨットハーバーだった。ヨットが並び、マストの先がかすかにウェーブを描いて揺れている。煙草を風見鶏の口で消し、空中に浮き上がった。

そのまま、真上に飛んだ。ぐんぐん浮上した。おつと、カモメとニアミスだ。驚いたカモメは右旋回をして離れていった。薄い雲で煙ってきたところで、今度は海に向かって急降下。

速く、速く、もつと速く。

風圧で息が苦しく、顔がつぶれそうだった。きらきら輝く海がどんどん迫ってきた。視界のすべてが海になった瞬間、手の先を少し上に向けた。

「ざばっーん」

海面は派手な音をたてて、白い水しぶきを上げ、二つに割れた。そのまま僕は海に白い傷跡をつけながら、海面すれすれに飛んだ。汽笛が聞こえた。タンカーだ。僕は、急浮上した。危ないところだった。タンカーは僕が作った波の影響で大きく揺れていた。汽笛が何度も鳴っていた。僕は、背面をそらし

空を見ながら飛んだ。上も下も、全部、青だった。いつのまにか、また神戸に戻っていた。背中にざわめきを感じたので、くるりと下を向いた。西に向かう電車と競争したくなった。左旋回し、えんじ色の電車の上空に出た。ちようと特急のようだ。三宮までの競争だ。身体をぴんと張り詰め、腕を前に前に伸ばした。あつと言う間に、電車を追い抜いてしまった。ふと右側をみると、動物園が見えたので



慌てて右旋回をした。かなり大きな動物園で、中央あたりに野球場よりも大きなドームまであった。ドームの屋根は、開放されていた。目に付いたのは、象だった。十頭ほど見えた象がすべて鼻を上げ、僕の方を見た。

「ばおーーー。」

鳴き声が聞こえたと思ったら、他の動物まで騒ぎ出したようだ。動物園全体からいろいろな声や音が騒

然と聞こえ出した。僕を歓迎してくれているのか。それとも、怖がっているのか。

北野の異人館から布引の滝の上空に出た。大学の人に付き合った雅美とはこのあたりをよくデートした。そう、彼女には本当に悪いことをした。妊娠していることを聞かされたのは滝の上にあるハーブ園のレストランでだった。僕はショックだった。

就職は内定していたけど、まだ結婚できるほど何も準備はできていなかった。それよりも、そんなことで内定が取り消されるのではないかというのが一番恐れていたことだった。彼女は

「健二には関係ないことだから、私は私で勝手にするから。」

と、まるで産んで育てるような口調だった。僕は、困惑した表情を作りながら恐る恐る、かつ、残酷に

「墮ろしてくれ。」とお願いした。彼女は静かに泣くだけで何も返事はしてくれなかった。その後も何度か会ったけどそのたびに、「自分のことは自分でするから。」と、同じ返事が返ってくるばかりだった。とうとう僕は彼女の前で土下座をして謝った。

「許してくれ。」

苦しめたのは僕なのに、まるで僕のほうが傷ついたように泣いた。数日後、彼女は僕の前から姿を消し

た。大学を中退し、九州の田舎に帰ってしまったのだ。一通の手紙を残して。それには「あなたの望むとおりにしました。」とだけあった。

僕は布引の滝の上空で浮かんだまま、涙を流していた。夕陽が目染みた。あれから8年、彼女は どうしているのだろうか。田舎で幸せに暮らしているのだろうか。拭き取った涙がきらきらと手の上で輝きだ

した。その輝きは手から腕へ、そして全身を覆い尽くして行った。僕の身体が発光している。透明に近い銀色だったが、身体の内部は冷凍庫に入ったように冷たくなった。と、その瞬間、僕は青い光になった。夕陽の方向に飛んだ。青い光がオレンジの中に溶けた。太陽の大きさは変わってなかった。どこかの街の上に、僕は浮かんでいた。遠くに山が見える。静かに灰が舞い上がっている。桜島だ。ここは鹿児

島なんだ。雅美の故郷だった。足元を見た。

団地がいっぱい並んでいた。まるでカメラがズームアップするように、一軒のベランダに視線が吸い寄せられた。

あれは、もしかして……。雅美だった。全然変わっていない。昔のままの雅美だった。その雅美が洗濯物を取り入れている、口元に笑みを浮かべながら。近

くに行きたかった。あのベランダに降りて行きたかった。でも、どこかでブレーキがかかっていた。部屋の中から子供のような声がした。雅美がそれに応えた。

「おかえり、健ちゃん。」

え？ 健ちゃん？ 僕と同じ名前……もしかして、まさか。ベランダのサッシを開けて、子供が出てきた。小学生の男の子だった。名札をつけていた。ここか



らは見えるわけもないが、目を凝らしてみた。名札の文字がはっきりと見えた。

「○○小学校1年2組 白瀬川健一」

白瀬川は彼女の苗字だ。それに小学校1年生って確か、7歳ぐらい……名前は健一。顔も、どこことなく僕に似ている気がする。雅美は、墮ろさなかつたんだ。雅美は僕の子供を一人で育ててくれていたんだ。もうじつとはしていられなかった。あの二人に何かし

なければ…。

僕は雄叫びをあげた。

「うお~~~~~！」

鹿児島を街を一気に飛び越え、海の上に飛んでいった。僕は涙を流していた。感謝したかった。僕を産んでくれた両親、一緒に暮らした家族や、友人、洋子、そして雅美に、今まで出会った全ての人に。

飛んだ。

飛んだ。

飛んだ。

飛び散った涙は虹になり、星になった。

海を越え、

橋をくぐりぬけ、

山を越え、

滝に飛び込み、

樹海をすりぬけ、

雲を突き抜け、

地球を見下ろし、

流れ星のように空間を飛び越えた。

元の場所に戻るはずが、いつのまにか、何処かの建物の上空に来ていた。下には黒い服を来た人がいっぱいいた。胸騒ぎがした。吸い寄せられるように、

地上に降りた。どこかで見ることがある人がたくさ  
んいた。会社の人も、大学時代の友人も、親戚も……。  
これは、どういうことだ。話かける勇氣はなかった。  
身体が震え始めた。

「おいおい、そんなもん、持ってくるなよ。」  
声の方を振り向くと吉川だった。大学時代の友人で、  
礼儀正しく、そして気使いができるやつだった。そ  
の吉川にたしなめられたのは同じく大学時代の友

人で松原だった。こいつはおっちょこちよいだった。  
松原が新聞を広げていた。

「そんなもん、早よ、しまえ。」

と言われているにも関わらず、松原は食い入るよう  
に新聞を見ていた。僕は近づき、後ろからそっと覗  
きこんだ。

「痛かったやろなあ。」

と松原は泣き声で呟いた。

『5月28日午後7時ごろ、大阪市南成区、〇〇食品会社員、田中健二さん（30）方から、女性の声で「頭から血を流して死んでいる」と110番通報があった。駆けつけた南成署員が調べたところ、ウイスキーボトルで、自分の頭を殴打し自殺を図ったと見られる健二さんを発見。直接の死因は出血多量死で死後1週間たった。遺書はなかったが、自殺をほのめかすような小説を執筆したものが見つ

かっている。110番したのは同僚の女性（27）で、田中さんが無断欠勤しているのを不審に思い、尋ねてきたところ、異臭がするので、管理人に鍵を開けてもらったことから発覚した。同僚の女性によると、田中さんは1ヶ月ほど前から仕事で悩んでいた様子で、食事もまともにとっていないようだったので、心配をしていたと言う。』





あれから何年たったのだらう。数え切れないほどの年月が過ぎて行った。また大きな地震があり、六甲の地形もさらに変わってしまった。でも、風吹き岩だけはそのままだ。そう、僕が守っている。毎日、風吹き岩に座って、昔、神戸と呼ばれた街を見下ろしてる。あの時代に出会った人たちは、みんなそれ

どれ好きな場所で好きな姿をして、くつろいでいる。  
ちなみに、洋子は北の大地で樹になった。寂しくな  
ったら、空を飛んで会いに行っている。

雅美と健一には、彼女たちがこちらの世界に来るま  
で、僕はできるだけの手助けをした。彼女には伴侶  
を引き合わせた。バツ一の公務員だったけど、一戸  
建ての家を建て、最期まで添い遂げることができた。

健一には人生の岐路の折に、ヒントとなるようなものを、それとなく彼の目や耳に触れるように仕向けた。彼は建築家としての道を選び、その世界ではかなり有名な人物となった。もちろん、僕の手助けがきっかけになったかもしれないが彼自身の才能と努力の結果だと、思っている。

君も空を飛びたくなったら、ここにおいで。僕が一

緒に飛んであげようか。それともイノシシのヒロミに背中を押してもらおう？

完

## 風吹岩

<http://p.booklog.jp/book/67067>

著者：門哉慧遥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hull1960/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67067>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67067>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ